

Title	孫悟空と白猿伝説
Sub Title	Sun Wu-k'ung and the white monkey legend
Author	成行, 正夫(Nariyuki, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1975
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.34, (1975. 2) ,p.30- 40
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00340001-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

孫悟空と白猿伝説

成 行 正 夫

—

小説「西遊記」の成立の過程において最も重要な登場人物は孫悟空であろう。「大唐三蔵取経詩話」に現われた猴行者が、小説「西遊記」の中の孫悟空に成長したのちも、孫悟空はさまざまな伝説の中に姿を見せている。玄奘の旅行は実際は単身で出発したものであり、「取経詩話」以下の物語が、みな荒唐無稽のつくり話であることは言うまでもない。しかし、そこに登場してくる孫悟空、沙悟浄などが、小説作者のまったくの空想の産物とは考えられず、やはり何か基づく説話や伝承があったものと思われる。孫悟空がどのような説話から生れてきたかについては、既に考察もなされているが、⁽¹⁾ここでは、孫悟空と白猿伝説との関係およびその周辺の伝説をみることによって、孫悟空の出自および民俗的背景について考えてみたい。⁽²⁾

「西遊記」成立の過程は、次のような表にできるであろうか。⁽³⁾

大唐三蔵取経詩話——(朴通事諺解)——(西遊釈尼伝)——明本西遊記

〔小説〕

.....(呉昌齡唐三蔵西天取経)——楊東来本西遊記

〔戯曲〕

孫悟空は、「大唐三蔵取経詩話」では猴行者とよばれている、「朴通事諺解所引西遊記」では、斉天大聖、孫行者、吾空の三つの名前がみえ、「楊東来本西遊記」は、通天大聖、孫行者、孫悟空とやはり三つの呼び方があるが、斉天大聖と通天大聖というように称号に違いがみえる。「清平山堂話本」の中の「陳巡檢梅嶺失妻記」、戯曲の「楊東来本西遊記」と「二郎神鎖斉天大聖」にそれぞれ、斉天大聖あるいは孫悟空の兄弟について述べている個所がある。「陳巡檢梅嶺失妻記」では、通天大聖、弥天大聖、斉天大聖の順で名前があげられ、小妹が泗州聖母となっている。「楊東来本西遊記」では、大姉が驪山老母、二妹が巫枝祗聖母、大兄が斉天大聖、次が通天大聖、三弟が要要三郎となっている。「二郎神鎖斉天大聖」では大兄が、通天大神、次が斉天大聖、姉が龜山水母、妹が鉄色獼猴、弟が要要三郎となっている。

これを見ると、多少の違いはあっても、三つの話が関連をもっているらしいことが分る。それはいずれにも通天大聖、斉天大聖の名がみえることと、泗州聖母、巫枝祗聖母、龜山水母が同一のものを指しているからである。⁽⁴⁾しかし、「清平山堂話本」の陳巡檢の物語は、猿の精が人間の妻を奪う白猿伝説の物語であって、「西遊記」とは何の関係も持たない。それならば、なぜ「清平山堂話本」と二つの「西遊記」の戯曲とが関連を持つのであろうか。それを解く鍵は「楊東来本西遊記」の中の孫悟空にあるようである。「楊東来本西遊記」の孫悟空（通天大聖）は、金鼎国の王女を奪って洞窟に閉じこめ、自分の妻にしているのである。このモチーフは白猿伝説と同じものである。孫悟空は王女のために西王母から仙衣を盗み出すのであるが、「朴通事諺解所引西遊記」では「明本西遊記」にみえない、西王母の仙衣を盗む話がみえていることから、元の頃の「西遊記」には、人間の女性を奪う孫悟空の話があったか、少くともそうした伝承の残像を留めていたと考えられる。⁽⁵⁾「大唐三蔵取経詩話」の猴行者と「明本西遊記」の孫悟空には、そうした性格がみられない。孫悟空の白猿伝的性格がはたして孫悟空に本来備わっていたものなのか、異常な能力をもった猿という連想で後に加えられたものかはなお判然としない。

白猿伝説の方から孫悟空との関係をみてゆけば、やはり「清平山堂話本」の「陳巡檢梅嶺失妻記」の猿の精が斉天大聖と号していることが重要な意味を持つように思われるが、ここではその兄弟関係に注意してみたい。斉天大聖の妹に、前にも述べた泗州聖母が挙げ

られているが、この泗州聖母がどういうものかは「清平山堂話本」には書かれていないが、巫枝祇聖母と龜山水母については、それぞれ次のような記載がある。

巫枝祇聖母、『把張僧拏住在龜山上』（「楊東来本西遊記」第十七齣）

龜山水母、『因水澄了泗州、損害生靈極多、被釈迦如来擒拏住、鎖在碧油繯中、不能翻身』（「二郎神鎖齊天大聖」頭折）

巫枝祇聖母の名は「古岳叢經」の中の龜山の下に鎮められた淮河の水神、無支祁と関係があるであろう。この短い記載から推測してみれば、泗州聖母は淮河の龜山の水神で、張僧というものを龜山にとじこめたことがあり、泗州に洪水を起して人畜に害を与えたために、釈迦如来によってとり抑えられ、碧油繯の中に永久にとじこめられたらしい。泗州聖母（巫支祇）については、また次のような記載がみえる。

『下龜山寺内有聖母井、即大禹鎖水怪処、俗伝、泗洲僧伽大師鎖水母於此、又名水母洞』（「大明一統名勝志」）

『泗州塔下相伝、泗州大聖鎖水母処、謬也』（「輟耕錄」）

『巫支祁屢為水患、僧伽大聖駐錫泗州、說法禁制、建靈瑞塔、淮泗乃安』（「泗州志」）

これによると、泗州聖母は僧伽によって龜山の井、あるいは泗州塔の下にとじこめられたという伝説があったらしい。「楊東来本西遊記」では、巫支祇聖母が張僧をとらえたということで、少し異同はあるが、「二郎神鎖齊天大聖」の龜山水母のように、最後には釈迦如来によってとりおさえられたのであろう。僧伽については「高僧伝」に、僧伽は觀音菩薩の化身であるという話が載せられていることから、龜山水母の話とつながりのあることが分る。中国の民間には、楊四將軍や灌口二郎神が水神の竜を退治しようとするところ（⁶）に觀音大師が現われて、竜をとりおさえる伝説があり、水神を繯や塔の下に封じこめるのは、鉢で白蛇をとりおさえ、それを雷峯塔の下に封じこめる、白蛇伝（⁷）の話を想い起させる。白蛇伝でも、法海禪師が白蛇を殺そうとすると魁星（北斗の第一星）（⁸）が現われて雷峯塔の下にとじこめて命は助けてやれと命令したり、釈迦がやってきて雷峯塔にとじこめるといった伝承があり、またこの白蛇が黎山老母（驪山老母）の弟子であるという伝承から考えると、巫枝祇聖母との関係が密接なことが分る。このようにみると、孫悟空の兄

弟である巫枝祇聖母を中心に、水神を退治し、観音や釈迦がその水神を封じこめるといふ伝説のあったことがわかる。そして、その水神の運命は実は孫悟空の運命と同じものである。孫悟空は天上をさがしたため、玉帝から派遣された二郎神君にとらえられ、逃げ出したところを釈迦如来にとりおさえられて、五行山の下に押しこめられてしまう。無支祁が猿形の水神であるという「古岳漚經」の話からも、「明本西遊記」の孫悟空は、捉えられて永久に封じこめられる水神と関係のあることが推測できる。「楊東来本西遊記」の孫悟空も同様に、二郎神にとらえられ、観音によって花果山の下に押しこめられるのであるが、この孫悟空は前述のように金鼎国の王女を妻にして、山の洞窟に住んでいるのであるから、ここでは水神を封じる伝説と白猿伝説とが混在しているようである。白猿伝説は既に漢代からあったことが分るが、⁽¹¹⁾白猿伝説と水神の伝説とが一緒になって、孫悟空の物語はつくりあげられたようである。その兆しの見えるのが「清平山堂話本」であり、「明本西遊記」では、白猿伝説の要素は削られてしまう。「明本西遊記」では、禹が治水の際に用いた金箍棒を孫悟空が竜王のところに取りにゆくなど、孫悟空の水神的要素が強くなっているように思われる。⁽¹²⁾

「楊東来本西遊記」には、孫悟空の大姉に驪山老母が挙げられており、この中に登場してくる鉄扇公主が、『我和驪山老母是姊妹兩個、我通風、他通火』(第十八回)といっていることから、驪山老母は水ではなく、火と関係することが分る。しかし、鉄扇公主が自分は驪山老母と姉妹であるといっているのに、前に出てくる孫悟空の兄弟の中には名前が挙げられていない。一つの物語の中でこのような違いがあるのは奇妙である。この疑問を解くには、鉄扇公主と驪山老母とは義姉妹であると考えを以外にない。つまり、鉄扇公主が三兄弟の誰かの妻であると考えたと、右の矛盾は解決する。鉄扇公主については、「四遊記」の「南遊記」に鉄扇公主が華光天王と術比べに負けて華光天王の妻になる話のせられている。この華光天王というのは、もと釈迦如来の法堂の前の灯火の精で、独火大王を焼き殺したために、陰山に送られようとしたのを観音が救って馬耳山娘娘の胎内に送りこみ、転生して生れた靈光が、紫微大帝に殺されて、更に転生して炎玄大王の子供に生れた靈耀のことである。靈耀は、天上の火部兵馬大元帥に任命されたのち、瓊花を玉帝の太子から奪いとって、華光天王と名のり、天上を騒がして下界に下り、追手を避けるために再び、人間に化けている吉芝陀聖母に投胎し、玉帝の派遣した哪吒太子と戦い、武器の金磚を取られ、代わりに玉環聖母から金塔を騙し取り、取り返しにきた玉環聖母の娘の鉄扇公

主を打ち負かして妻にし、母親の吉芝陀聖母を鄭都から救い出し、母親の「吃人」の病気を治すために花果山の齊天大聖に化けて、西王母の桃を盗み、冤罪をかけられた齊天大聖と敵対したのを火炎王光仏のとりなしで齊天大聖と義兄弟となり、如来のもとで仏道に帰依するのである。「明本西遊記」では、鉄扇公主は大力牛魔王の妻であり(第五十九回)、孫悟空は牛魔王らと七兄弟の義を結んでいる(第三回)。牛魔王は来歴がよく分らないが、鉄扇公主を妻にし、哪吒太子に捉えられるという点は華光と共通している。華光が天上を騒がし、西王母の桃を盗むのは、孫悟空の話と同じであり、孫悟空を捉えるときには哪吒太子も登場してくる。また、「楊東来本西遊記」では孫行者は山神に、鉄扇公主に夫がいるかどうかたずね、いないときくと、鉄扇公主に夫婦になろうと呼びかけている(第十九回)。このようにみえてみると、鉄扇公主をめぐる、華光、牛魔王、孫悟空は互いに関連がありそうである。「南遊記」にみえる華光の物語は、あるいは孫悟空の物語の原型の一つではないだろうか。「楊東来本西遊記」の第八回には「華光署保」で、唐僧の西遊を護ることになった観音、李天王、哪吒太子、灌口二郎ら十人が集まったが、華光が一人遅れて現われ、唐僧の西遊の保護を誓うという場面である。そこで華光が自分の履歷を述べているが、その内容は「南遊記」とほぼ同じである。しかし観音や李天王らが以下の場面で唐僧の危難を救っているのに、華光はその後登場してこない。それでは「華光署保」の一齣はなぜわざわざ設けられているのであろうか。甚だ大胆に推定するならば、華光と孫悟空に共通点がみられるように、孫悟空が途中、妖魔と闘いながら、唐僧を護って天竺へ旅をする話も元はあるいは華光について語られていたのではないであらうか。「南遊記」に登場する孫悟空には、奇都、羅侯、月孛などの子供があり、「楊東来本西遊記」の孫悟空と共に、「明本西遊記」の孫悟空よりも、一つ古い孫悟空の姿を反映しているように思われるのである。

二

次に孫悟空と巨靈神伝説との関係についてみてみたい。巨靈神は「明本西遊記」では第四回に登場する天神の一人で、宣花斧を武器に孫悟空と闘うのであるが、この巨靈神はもとは黄河の神であって、黄河の流れを妨げていた華山を手で二つにさいて、黄河の流れを

まっすぐにしたという伝説が伝えられている。次にその巨靈神伝説を記した文献で古いものを挙げておく。

漢、楊雄「河東賦」、「河靈曼頤、爪華蹈衰」

漢、張衡「西京賦」、「巨靈夙負、高掌遠趾、以流河曲、厥跡猶存」

晋、干宝「搜神記」、「二華之山、本一山也、当河、河水過之、而曲行。河神巨靈、以手擘開其上、以足蹈離其下、中分為兩、以利河流、今觀手迹於華岳山、指掌之形具在、脚跡在首陽下、至今猶存」(卷十三)

ここにみるように、すでに漢代からその伝説は存在し、右の三つは同一の伝説を表わしていると思われる。巨靈が華山をひきさいたときの掌と脚の痕が残っているということは、後代の文人の文章にも記されており、元代の雜劇にも「巨靈神劈華岳(巨靈神劈華山)」というのがみえている。ところが、やはり元の雜劇に「劈華山神香救母」、「沉香太子劈華山」というのがある。神香と沉香とは音が同じなので、この二つの劇は同じ内容のものであろうが、こちらは華山をさくのは巨靈ではなく沉香(神香)であり、しかも「救母」という要素が加わっている。このような変化はなぜ生じたのであろうか。明の呉同春の「太華雙遊記」をみると次のような記事がみえている。

『舍身崖、崖傍有石寶、大容十数人、道士曰、此天羅地網、昔巨靈母庄於此、巨靈劈山得出』

これによれば、巨靈の母が華山に閉じこめられ、巨靈が華山をひきさいて助け出したという伝説があったらしい。河の流れを通すために華山をさいたという本来の河神伝説からすでに変化していることが分るが、この巨靈伝説と沉香の伝説とが結びついて、雜劇の「劈華山神香救母」となったものと思われる。「劈華山神香救母」は劇そのものは残っていないので、その内容は推定するほかないが、その題名から考えて、宝巻や彈詞に残っている沉香救母の物語と余り大差のないものではなかったかと思われる。沉香救母の物語は「董永沉香合集」⁽¹³⁾に五つ集められているが、その中の「沉香宝巻」の話は次のようなものである。後漢の時代、劉向が科擧の試験を受けるため上京の途中、華岳娘娘の廟を通りかかり、廟の壁に詩をかきしるしたことから華岳娘娘が劉向を見初めて二人は結ばれるが、三日で宿縁は切れ、劉向は都に向うが、華岳娘娘から贈られた宝のために命を落しそうになるのを危うく救われ、その宝を皇帝に献上

して揚州の知府に任命される。一方、華岳娘娘は劉向の子供を宿すが、そのことを知った兄の二郎真君は憤って華岳娘娘をとらえて華山の下にとじこめてしまう。やがて華岳娘娘は子供を生み、沉香と名づけて夜叉に劉向のもとに送り届けさせる。成長した沉香は母親が華山にとじこめられていることを知り、法術を終南山で学んだのち華山に赴き、二郎神に邪魔をされるが、ついに華山を斧で真二つに切り裂いて母親を救いだすのである。「新編説唱沉香太子全伝」はほぼ同じ筋で、華岳娘娘は華岳三娘となっている。「新刻宝蓮灯救母全伝」では沉香の父は劉晋となっており、沉香は霹靂大仙について法術を学んだのち、霹靂大仙から萱花斧を借りて二郎神と斗い、華山黒雲洞から飛竜井に移された母を救い出す。「新編説唱宝蓮灯華山救母全伝」では、沉香の父は唐の劉錫となっている。霹靂大仙に法術を学び、昔二郎神が彼の母を救い出すために桃山を裂いた斧を借りにゆき、二郎神の父の楊天祐に化けて二郎神にその斧で華山を裂かせて母の華山三仙聖母を救い出す。「沉香救母雌雄劍」では沉香の父は唐の劉希となっている。希と錫は現代音では同じ音なので前の劉錫と同じであろうが、華山三仙娘娘をとじこめるのは兄の二郎神ではなくて玉帝になっている。霹靂祖に法術を学び、二郎神の廟から劈山斧を盗み出し、華山を裂いて母を救いだすのは前の話と同じである。以上五つの沉香救母物語は大別して前三者と後二者の二つのグループに分けることができる。華山の仙女が華山にとじこめられるのはいずれにも共通しているが、仙女と結ばれる下界の間は、前三者では漢の劉向あるいは劉晋、後二者では唐の劉錫または劉希となっている。そして前三者では沉香が華山を裂く斧は何仙姑の洞窟にあったり、霹靂大仙からもらったりするのであるが、後二者はいずれも二郎神の斧を盗み出してくるのであり、その斧はもと二郎神が母を救い出すために桃山あるいは華山を裂くのに用いたものであった。つまり後二者では沉香救母の物語と二郎神救母の物語とが重なり合っているのである。それでは二郎神救母の物語はどのようなものかという点、先ず「明本西遊記」の第六回で孫悟空が二郎神に向って次のようにいっている。

『我記得当年玉帝妹子思凡下界、配合楊君、生一男子、曾使斧劈桃山的、是你麼』

彈詞の「新編説唱宝蓮灯華山救母全伝」にはこれと同じものと思われる話がみえている。

『西漢、明帝年間、湖広荊州府有一書生楊天佑、在桃山洞中修煉、斗牛宮張仙姑下凡、与他配合姻婚、生下一男一名、男名二郎、女

名三娘。事被玉皇聞知、大怒、降旨將仙姑庄在桃山受苦。後來二郎劈山救母、玉帝見喜、二郎封為西川灌口妙道真君、三娘封為西嶽

(嶽) 華山三仙聖母』

この二つの話でみると、二郎神救母伝説と沉香救母伝説とは全く同じ型の話であることが分る。二郎神の母は玉帝の妹であるが、沉香の母は華山の三仙となっており、また父の方は沉香が劉向、劉晋、劉錫、劉希といずれも劉姓であるが、二郎神の父は楊天佑であつて、本来治水伝説に始まる二郎神伝説と関係のあることが分る。沉香救母伝説と二郎神救母伝説とどちらが最初にあつたかということとははっきりとしない。しかし、元の雜劇には沉香救母の物語しかないことや、二郎神伝説はもともと四川地方に始まつた伝説であることなどから考えて、沉香救母伝説が先きではないかと思われる。巨靈神伝説から沉香救母伝説、さらに二郎神救母伝説と發展していったものと思われるが、救母の話が加わつてきた背景には、華山の神女と下界の人間とが結ばれる伝説があるのではないだろうか。科挙に応じるため都に赴く途中、華岳の三女と結ばれ、子供まで生れるという「広異記」の話などは、明らかに沉香救母物語の下敷になつていゝと思われる。

また神女が華山の下にとじこめられるという発想は、おそらく華山に冥府があるという信仰と無関係ではないと思われる。⁽¹⁵⁾「隋書」越王秀伝には次のような記載がみえている。

『請西岳華山慈父聖母、神兵九億万騎、収楊諒魂神、閉在華山下、勿令散蕩』(卷四十五)

人間の魂を華山の下にとじこめて出てこさせなくするという話であるが、河の流れを変えるために華山を裂いた河神巨靈伝説に後世、華山神女の婚姻譚、華岳冥府の信仰などが一緒になつて、巨靈救母、沉香救母、二郎神救母の物語に發展していったものと思われる。ただ、四川に起つた二郎神伝説がなぜ華山の伝説と一つになったのかはよく分らないが、おそらく巨靈と同じ水神であるといったことから結びついたのではないかと考えられる。二郎神伝説が盛んになったのは宋以後であるから、二郎神救母伝説もそのずっと後であるうと思われる。

沉香救母伝説では華岳三娘をとじこめるのは五例のうち四例までが兄の二郎神であるが、そのうちの三つに孫行者が登場してくる。

しかし、「新編説唱沉香太子全伝」においても、「新刻宝蓮灯救母全伝」においてもそこに登場する孫行者はいずれも二郎神の配下としてであり、「西遊記」の物語が普及してから後のものであって、孫悟空についての異系統の伝承ではないようである。民間においては、二郎神と孫悟空とは共に近い位の神とみられていたようである。⁽¹⁶⁾二郎神救母物語の一つである「新出二郎劈山救母全段」はやや他の物語とは性格が異っているようである。玉帝の妹の三公主が下界の楊天佑と結ばれるのは他と同じであるが、その筋は三公主が二郎神を生んで三日めに長江のほとりで着物を洗い、四海五湖に通じる長江の水を汚したため、東海の竜王が怒って玉帝に訴え、天将が三公主をとらえに向ったところを花果山の孫行者が現われて三公主を奪い、桃花崗の下にとじこめる。そのことを知った二郎神は開山斧を手に入れて桃花崗を二つに切り裂いて母を救い出し、孫行者をとらえに行きたいと玉帝に願い出ると、玉帝は、孫悟空は唐僧を守って取经の旅に出かけ、妖怪を退治することになっているから、西遊の途次、妖怪たちに仇を討たせようといつて、二郎神を止めさせるのである。この話をみると、二郎神と孫悟空とは対立する関係にあり、二郎神が孫悟空をとりおさえるというテーマで、その孫悟空は女性を奪って山の洞窟にかくすという白猿伝説と関連がありそうであり、二郎神劈山救母の物語と西遊記の物語とが関係づけられている。この「新出二郎劈山救母全段」は、民間における孫悟空の白猿伝的性格、二郎神の水神封鎖伝説と救母伝説とを西遊記の因縁として説いた極めて興味ある資料と思われる。「西遊記」の成立は決して単純なものとは考えられない。小説「西遊記」は一つのもつた形とはなっているが、孫悟空と二郎神についてみてても、その伝承はさまざまに変化し、分岐している。小説「西遊記」もその変化の過程における一つの姿としてみることができないだろうか。

最後に、巨靈伝説と白猿伝説との関連を示す資料として、チベットに次のような伝説が伝わっている。昔、チベットが大洪水にみまわれたとき、観音がヒマラヤ山を東南にさいて水を引かせ、やっと地面が顔を現わした。そこで観音は一匹の猿となつて妖魔と結婚し、子供が生れてそれがチベットの人間の先祖になつたという。⁽¹⁷⁾これは河神巨靈伝説と白猿伝説とを合せたようなものであるが、白猿伝説がそもそも始祖神話であるらしいこと、白猿伝説が伝えられている四川地方は地理的にチベットに近いことなどを考えあわせると、巨靈伝説、白猿伝説もその淵源はあるいはチベットのこのような伝説に求められるかもしれないのである。そしてこれら猿を人間

の始祖とする伝説の背後には、インド、中国、日本にわたる地域にある猿神信仰の存在が考えられるであろう。インドの各地では村の入口に猿形の像が道祖神として立っていて、不妊の女性は夜この像を抱いて子供をさずかるよう祈る民俗があるという。⁽¹⁸⁾そしてその石像の猿が「ラーマヤナ」に出てくる猿ハヌマンだという説もあるらしい。⁽¹⁹⁾もしそうであるならば、かつて論議された孫悟空と「ラーマヤナ」との関連は、再び別の角度から検討されねばならないであろう。既にみたように、小説「西遊記」の孫悟空には白猿伝的性格はきわめて稀薄である。その孫悟空とハヌマンの描写が似ているとか、「ラーマヤナ」の翻訳を「西遊記」作者がみたかどうかといった議論⁽²⁰⁾とは別に、孫悟空にまつわる白猿の伝承をみていったとき、猿神ハヌマンとの驚くべき一致点が見出されるのである。

注(1) 内田道夫氏は「西遊記の成立について」(「文化」27号)において、孫悟空の物語は「西国志」の「大頭仙人」の話、「仏説師子

月仏本生経」の仏教説話に取材したものであらうと述べられている。

(2) 「白猿伝説」については、拙論「白猿伝の系譜」(「芸文研究」33号)を参照していただきたい。

(3) 大田辰夫氏の「西遊記」関係諸論文による。「神戸外大論叢」所収

(4) 陳炳良「中国之水神与西遊記」(「寿羅香林教授論文集」p. 302-303) 参照

(5) 大田辰夫「朴通事諺解所引西遊記考」(「神戸外大論叢」10・2) p. 9-10 参照

(6) 黄芝崗「中国の水神」p. 1-11

(7) 馮夢龍「警世通言」第二十八卷「白娘子永鎮雷峰塔」

(8) 傅惜華編「白蛇伝集」所載「水門」p. 35-36

(9) 同右「合鉢」p. 68

(10) 同右「雷峰塔」p. 171, 「浙江杭州府錢塘鼎雷峯宝卷」p. 211, 214

(11) 拙論「白猿伝の系譜」(「芸文研究」33号) 参照

(12) 石田英一郎「河童駒引考」

(13) 杜頤陶編「董永沉香合集」上海出版公司、1955

- (14) 「広異記」華嶽神女〔太平広記〕卷三〇二)
- (15) 澤田瑞穂「地獄変」p. 54 参照
- (16) 北京中法漢学研究所「民間新年神像図画展覧会」民国三十一年、p. 159 に上段中央が玉皇大帝、第三段めに観音、火神、竜王、孫猴、二郎の神が画かれているとある。
- (17) 「新亜細亜時報」三卷、四号(黄芝崗「中国的水神」p. 176 引)
- (18) 山田宗睦「道の思想史」p. 97
- (19) 同右 p. 97 参照
- (20) 陳炳良「中国之水神与西遊記」p. 299-300 参照